金で愛が買えぬというのならば、愛などいらぬ！

リーグロード

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日テンプレ的な乙女ゲームのような世界にＴＳ転生したジュリア・カイニス・アリアは突如として婚約していた王子に婚約破棄を申しだされた。

その理由は国を守護する龍の愛し子であるメアリーに対してのイジメ行為からだった。

それによって両親からも勘当されたアリアは、その罪を償うという名目で教会に向かっていると、その辺りを縄張りにしていた盗賊たちに襲われてしまう。

これは金と自由を愛する悪女が国を滅ぼすバッドエンド直行のストーリーを目指すものです。

目　次

目障りな女が主人公で蹴落とされました。 ―――― 1
奪っていいのは奪われる覚悟のある者だけだ ―――― 17
スカウトしたいならば、まずは全力で叩きのめせ!!! ―――― 23

目障りな女が主人公で蹴落とされました。

拝啓、お父様お母様。お元気にしておられるでしょうか？　私は体元気ですが、精神は死にかけです。

え？　何故かって？　それは、勿論――

「ジュリア・カイニス・アリア！　お前との婚約を破棄する！　そして、俺は新たにこのメアリーと婚約することをここに宣言する!!!」

「そんな!?　ドラグール様。こんな伯爵家の私とご婚約など!?」

「そんな悲しいことを言わないでくれメアリーよ。身分など私たちの間にはあってないようなものだ。それに君はこの国を守護する龍の寵愛を受けし愛し子なのだから、こちらからお願いさせて欲しい。メアリー、君と結ばれたい。こんな私でよければこの手を取って欲しい」

「――っ!!!　はい、不束者ですがよろしくお願いします」

うおおおおおおぉぉぉぉ!!!　っと周りが拍手喝采で喜んでいるが、目の前にいる俺のこと忘れてない？

あっ、言い忘れてたけど、俺の名前はジュリア・カイニス・アリア。そう、今さっき婚約破棄された哀れな女。すなわち、悪役令嬢ってやつだ。

さて、このまま事態をただ黙って見ているだけで済むような立場なら、テンプレ乙！　と言ってその場を去るのだが、生憎とこの事件の当事者であるからそうもいかない。

このまま黙っていれば、場の空気に流されてどんどん立場を悪くしていくだろう。少々面倒だが、そろそろ動くとするか。

「まったく。お騒がしいこと……。人が婚約破棄された直後だというのに、その後すぐに新たな女に乗り換えて周りも大声で祝福だなんて、品性を疑ってしまいますわ！」

先程まで王子との婚約に喜んでいたメアリーも、婚約破棄されたアリアの声を聞いた瞬間に顔を青ざめる。

「アリア様……」

「耳を貸すなメアリー！　貴様！　よくもまあその様な口が叩けるも

のだ。私のメアリーに嫉妬か！」
「あらいやだ。私は別にメアリーに嫉妬したわけではなく、人の不幸の直後に祝うようなことがあるとはいえ、その不幸な人間を置いてきぼりにして拍手喝采を行う人間の気が知れないと言ったまでですわ……」
　手に持った扇で口元を隠しながら、この場にいる者を見渡す。こちらと視線があうと皆視線を下にズラして目を合わせないようにする。
　誰も好き好んで虫の居所の悪い猛獣と目を合わせようとする物好きはいない。今の彼女はまさに怒り狂うトラと表現したとしても否定する者は誰もいないだろう。
　誰もが何も言えずにいるこの雰囲気の中で、無鉄砲にも突っかかってくるのは、今では元がつく婚約者であるこの国の第一継承権を持つ王子のガリア・フォート・バン・ドラグールだ。
「ふん、不幸だと。何を言っている。貴様が今までメアリーにしてきたことを思えばこの程度は不幸のうちに入らん！」
「へぇ～、そうなんですか？　メアリーさん？」
「そ、それは……」
「だから耳を貸すなメアリー！　この女の戯言でどれだけの者が傷ついたことか!?」
「あら、それは酷い誤解ですわね？　あれは私は至極真っ当な発言で、勝手に怒った挙句に失言した人が悪いんじゃありませんの？　あの程度の言葉遊びで泣いてしまうようならば政（まつりごと）は到底務まりませんわよ」
　女狐のような目と声で巧みに男女をそそのかし、あげくに感情的になって失言するように誘導して陥れた。言葉にすると完全な悪女だが、ここに国の未来を左右する立場の者とつければ、この場にいる人間の誰もが感情的になった者の負けであり悪であると言うだろう。
　なにせ、ここにいる大抵の人間は大なり小なり同じ様な手管でその地位に着いた者がほとんどなのだから。例外がいるとすれば、目の前にいる王子とそこのメアリーという女のみ。
　この王子は生まれたその瞬間にその地位が確定しており、王妃も病

で早々に亡くなった為に兄弟はおらず、漫画やアニメなんかでよくある王位争奪戦といったものを経験したことがない。
それに、この王子の周りの者は王妃に仕えていた者たちばかりで、亡くなった王妃の忘れ形見ともいえる王子を甘やかした結果このような典型的な正義バカ王子となってしまっている。
もう一方の彼女は元は平民の者だったのだが、この国に仕えている伯爵の妾の子であり、その存在を知った伯爵によって貴族の子が通うこの学園に転入した。
……つまるところ、典型的な王道乙女ゲームの設定を忠実に守っている主人公的な立ち位置なのだ。そんな彼女が王子と出会うのは必然的と言っても過言ではなく、結果今のこの状況に至ったというわけだ。
後はもうお分かりだろう。そのまま私が婚約者である王子に馴れ馴れしく近づいてきた彼女をいつも通りに蹴落とそうとしたら、運命ともいえるべき強運で様々な男性から守ってもらいながら、こちらの策を次々に潰していった。
とはいえ、それはそう問題ではなかった。策が潰されたことも犯人が私だと特定されたことも。
結局は伯爵と公爵という絶対に超えられない身分の差があったから。さらに言えば、罪を犯したのはメアリーの方だ。いかに平民から貴族になったばかりとはいえ無知が過ぎる。
婚約者がいる殿方を相手に距離や言葉遣いが近すぎる。それに相手は王子だ。
一介の伯爵風情が気安く声をかけていい相手ではない。そんなことを知っている筈なのに、彼女を庇い立てする男共に辟易する。
大人たちにも既にメアリーの所業は話しており、それに対する私の行動は全て無視するという遠回しな了承は得ている。
この学院は乙女ゲームらしく『ここでは身分の差は一切関係ない。全てが平等である』とのたまっている。
だが、この学院でこれを勘違いしているものは少ない。ここに書かれている身分の差は一切関係ないとは勉学に置いて学ぶ姿勢のこと

を指しており、全てが平等とは王族から男爵までの身分のものが受ける授業の内容が平等というだけのもの。
平民からは身分関係無しに実力だけで勝ち上がれる本当のエリートを排出する場所と認識し、貴族からは上の爵位に立つ者に媚びながら名前を覚えてもらい、最低限の知識と貴族の常識や暗黙のルールを学ぶ場所という認識だ。
それが理解できていないメアリーは、貴族と平民との認識の誤差に気が付かずに学院生活を送っている。
だからこそ、普通の貴族の子ならばあえてしない行動をしたり、しなくてはいけない所作も無視したりと破天荒な行動ばかりする。それも本人は無自覚でするので、尚のこと始末が悪い。
そんな行動が彼女を囲う男子共の目に止まり、お決まりの『お前みたいのは初めてだ。本当に面白れぇ奴だな』を口走る。
そりゃ初めてでしょうとも、そもそもメアリーは貴族の頂点に立つ王族や公爵なんかの位に立つ者の目に触れるような立場の人間では元々無かったんですからね。
そうやって骨抜きにされた男子共を味方につけながら乙女無双を繰り返してここまでやって来た。
本来ならば、例えいかに爵位の高い貴族が味方をしようとも、彼女は決して王子と婚約などできはしない。
なにせ王子の婚約者が公爵令嬢という立場に立つ俺に加えて、何よりも貴族はルールを守り品位を遵守する生き物だ。それを己の自分勝手で婚約破棄したり、ましてや最もルールを守るべき立場の者が、ルールを知らないからと言って破る者を保護すればどうなるか結果は目に見えている。
そう思って安心している俺の背後を刺し貫くように、メアリーはとっておきの切り札を土壇場で手に入れてきやがった。
最初に王子もメアリーに告白する際に言った言葉を覚えているだろうか？『君はこの国を守護する龍の寵愛を受けし愛し子』と言ったのだ。
そう、この世界はただの中世ヨーロッパを舞台にした乙女ゲームの

ようなものではなく、異世界の剣や魔法やモンスターが存在する乙女ゲームだったのだ。
この国は世界の五大元素を司る『木』・『火』・『土』・『金』・『水』の内の水を司る龍が守護している。名を水龍メギア・ドライス。
世界には他に木龍ギガナ・ドライア、火龍ボエナ・ドラブス、土龍アーズ・ドラグナ、金龍ゴルド・ドラキンの４体の龍が存在する。人々はそれら全ての龍をひっくるめて五大龍と呼んでいる。
そんな五大龍が何故人間の国を守っているのかと言えば、簡単な理由だ。ようは、惚れたのだ。龍という生物の次元を超越した存在が吐いて捨てるほどいる人間という種族にだ。
国家が出来る前の人類の歴史は侵略と逃走の日々だったと歴史書に載っている。弱いモンスターが巣くう住処を奪い取り、強いモンスターが近づくと荷物を纏めて逃げるというのが当時の人類の常識だった。
そんな明日をも知れない生活に終止符を打ったのは後に五大聖女と称される５人の少女たちであった。
彼女たちは生まれついての魔力が凄まじく高く、戦場では大の大人も顔負けの戦果を挙げ続けた。今まで敵わないと諦め逃げ出してきたモンスターの討伐や、立地が良く大型モンスターも寝床にする縄張りの征服など数々の偉業を成し遂げてきた。
人類はその勢いに乗って様々な地を侵略していき、人類の活動拠点を次々に増やしていった。やがて、少女たちは歳を重ね大人になっていき、絶世の美女と謳われるまでに育った。
だが、増長し過ぎた者には罰が下る。それは、人もモンスターも同じ事だ。
やがて自らの生活圏を広げ過ぎていった人類は手を出してはいけない領域に手を出してしまった。
それが五大龍の一匹である木龍ギガナ・ドライアが眠る地であった。そこは木が鬱蒼と茂っており、食べられる果実が大量に実っていたと記されており、人類はこぞってそこに押し寄せたという。
しかし、そんな無粋な足音に目を覚ましたのは生物が決して敵わな

い生き物だった。
自らの縄張りに土足で踏み込んできた人類にギガナは怒り狂って大地をひっくり返したという。
そんなギガナの怒りを鎮めたのもまた人類だった。
人類の旗印ともいえる5人の聖女は3日3晩戦い抜き、やがて龍と聖女は互いに認め合ったとされる。そこからギガナはボエナ、アーズ、ゴルド、メギアの4体の龍に自分が戦った聖女の事を話した。偶然にも、5人の聖女の髪の色はそれぞれが木を表す『緑』火を表す『赤』土を表す『茶』金を表す『黄』水を表す『青』に染まっていた。
それから、5人の聖女と5体の龍は種族を超えた愛によって5つの国が出来た。
それから年月が経ち龍は生き長らえ、聖女は老いさらばえて死に絶えた。だが、その後の国を守る為に5人の聖女は子をなした。
父はおらず、龍と聖女の奇跡の御業によって生まれた子は親である聖女とは違ってただの一般人と同じ程度の魔力しか持たなかった。
国の誰もが当初はこれでは龍に守護してもらえなくなるのではないか？　と不安と恐怖に怯えていた。それを憂いた聖女と龍は国民に一つの約束を成した。
「我らの血を濃く受け継ぐ者がいる限り、この国の守護をし続けるだろう」
それから幾年もの時が流れ、龍と聖女の血を最も濃く受け継ぐ者を人は龍の寵愛を受けし愛し子と呼んだ。その愛し子はそれぞれの国を象徴する髪の色と強大な魔力を宿す肉体と守護龍に似たアザが証であった。
その愛し子はかならずどの時代にもいるというものではなく、先程述べた3つの条件が合わさって初めて愛し子になる為、なかには２００年以上も愛し子が現れなかったという国もあったそうだ。
愛し子がいる時代とそうでない時代では災害での被害や作物の収穫量等の結果が明らかに違っている。
さらに、国が強大なモンスターに襲われることは稀にあり、愛し子がいる時はその者の祈りによって国にたどり着く前に龍がモンス

ターを退治してくれるが、愛し子がいない時にはモンスターが国で暴れるまで龍が動かなかったとされる。
だからこそ、この世界の国では愛し子は貴重な存在であり、国を繁栄に導く大切な御方なのだ。
メアリーは確かに髪の色はこの国を象徴する青色ではあるが、それはこの国の半分くらいの人間はそうである。魔力も確かにそこいらの魔法使いと比べると１０倍以上もの差があるが、この俺はそれよりも更に高い魔力を有していたので話題にされなかった。
なら最後の証である守護龍に似たアザがあるのに何故この土壇場で気づいたかというと、彼女のアザは背中についており、今まで彼女は自らの背中を確認したことはないという。着替えの際も入浴の際も一人だった為に誰かに気づかれることはなかった。
それが偶々街中で事件に会ってしまい、それを視察で街に来ていた王子に見つかり、汚れた服や体を綺麗にする為に城に招待されて着替えの際に城仕えのメイドにアザを発見されたというわけだ。
いや、何回も言うけど何処の乙女ゲーのイベントだ！　当然その情報は城中に渡ったが、すぐさま緘口令を敷かれて知っている者は極わずかだ。そんな情報を何故この俺が知っているかというと、王子と結婚した後を考えて城の人間との人脈を作ろうと自らの手の者を紛れ込ませていたのだが、それがまさかこんな結果になろうとは……。この賢者であるアリアの目を持ってしても見抜けぬとは!!
そこからは王の権力を使って盛大にパーティーの準備を済まし、近隣の貴族達に招待状を送る等の王子と愛し子の婚約と俺との婚約破棄の外堀を秒で終わらせた。
くっ、あともう少しメアリーが愛し子だという情報を掴んでいれば……。
いや、この世界が乙女ゲームのようなものであんな如何にもな歴史がある時点でこの結末を予想できた筈だ。
俺も長年の公爵家という地位にあぐらをかいていたばかりに慢心していたというわけか！
これ以上思い返しても仕方がない。ここはもう無駄な抵抗はやめ

て大人しく引き下がるとしよう。
「さて、これ以上口論を繰り広げても無意味だということはよく分かりましたわ。確かに、いくら私が公爵家の人間としてマナーのなっていない者を叱ったという事実があったとしても、たかだか公爵令嬢如きが愛し子様に無礼な真似をしてしまい申し訳ございませんでした」
「そ、そんな……。私はただ……」
「くっ、この悪女めが！　とっととこの場を去るがいい！」
これ以上はもう後の祭り、最後に嫌味と皮肉を込めた謝罪で多少の意趣返しはできた。今回はこの辺で終わりとしよう。
「では皆様方。私がこれ以上この場にいれば折角のパーティーが台無しになってしまうでしょう。それではごきげんよう」
優雅に礼をして去っていくさまはまさにお嬢様で、先ほど婚約破棄されたばかりの者とはとても思えなかった。
逆に婚約破棄した筈の王子たちの方が婚約破棄されたかのようなザマだった。

おしとやかに去っていった悪女は……ブチ切れた!!!
「ザッケンナコラァァァ!!!!」
既に馬車に乗って周りにいる人間は執事のセバスと馬を操る従者以外はいないため、思いっ切り胸の中に詰まった鬱憤を叫び散らす。
馬車のガラスが壊れてしまうかと思うほどの声が自分の口から出たのは驚きだ。
とはいえ、それでおさまりがつくほどこのイライラは小さくない。これ以上叫ぶと喉を痛めるから叫びはしないが、腕組みしながらトントンと怒りの意を示す。
このまま家に着くまでにある程度はこの感情を鎮めておかねば両親に醜態を晒してしまう。
そうなってしまえば、完全に取り返しがつかなくなってしまう。
俺が好きなのは金だ。ただ金があればいいというわけではない。自分が自由に使える金が好きなのだ。誰にも文句は言われず、その後の余裕も考えなくてもいい大量の金が好きなのだ。

俺が元男の転生者だっていうのはもう分かっているだろう。別に最近の異世界転生モノと変わらないようなごくありふれた死に方だった。

前世の俺は平凡な毎日を送っていたが、大人になるにつれて金に関する問題を抱えていった。働いて働いて借金に消えていく俺の給料を見ながら欲しいゲームや漫画を見て見ぬふりをしていく生活に嫌気が一周して諦めがついた頃にトラックに潰されて死んだ。

その時に俺の胸中にあったのはまだ死にたくないという思いと、ようやくこの地獄を終えられるという矛盾した2つの思いだった。

そうして次に気が付いたのは病院のベッドの上ではなく、赤ん坊が眠るベビーベッドの上だった。

生まれて間もない頃は盛大に困惑したが、次第に状況を飲み込めてからは落ち着いていった。幸運だったのは俺が生まれたのは金銭トラブルなどに全く縁もゆかりもない公爵家だったということだろう。

もう二度とあんな金に悩まされるクソみたいな生活を送りたくはない。

だからこそ、公爵令嬢として様々な知識を得た。魔力があるからと死ぬ気で鍛え上げた。モンスターがいるからと魔法と戦闘スキルを学び続けた。

幸いにして、俺の容姿は輝くような青髪に誰もが振り向く美貌を持ち合わせていた。

その成果が王子との婚約だったというのに……。それがたった1人のヒロインの登場で全てが白紙になった。それも愛し子を迫害したといレッテル付きで……。

これが悪意によって起こされたものなのだったら事前に動きをある程度はキャッチ出来ていたというのに、まったくの悪意無しでこちらを貶めてくるのだからタチが悪い。

それも最後の最後まであんな『私そんなつもりでしたわけじゃないの?!』みたいな舞台上のアイドルみたいな態度を取られたら完全にコチラが悪者ではないか。

まあ、王族の財産目当てで王子との婚約を結んだし、ライバルとな

る令嬢なんかも裏で手を引いて蹴落としたりなんかと悪どいことなんかはしたが。
そうやってここまでの道筋を思い出していると、我が家が見えてきた。もう既にパーティーでの一件は両親の耳に入っているだろう。
この世界には魔法による電話モドキが存在する。だからこそ、これからが俺の今後の道を決める話し合いとなるだろう。
俺は公爵家の令嬢といっても、それは祖先や父の力であって、私自身の力ではない。漫画などでは何もしていない坊ちゃん野郎が家名で偉そうにふんぞり返っているのを見てムカついてはいたが、いざ自分がその立場に立てばこれほどまでに便利な武器はないと実感している。
だからこそ、この武器を手放した時、俺はただのどこにでもいる小娘に成り下がると確信している。
「だからこそ、ここが本当の決戦だ！」
門をくぐった先に待ち受ける両親との会合に心震わせながら、今まで公爵令嬢として生きてきた経験全てを持ってして挑む！

「このバカ娘がぁ!!!!」
「そうよ！　愛し子!!様になんてことをしたの!!!　今すぐに靴でも舐めて許しを乞いに行くべきよ!!!」
あっれぇ～？　おかしぞ？　決戦かと思いきや、まさかの負けイベントだった件について……。
「もはや貴様なぞ娘でも何でもない！　勘当する。ここから出ていけぇ!!!」

一方的にこちらの言い分を聞かずに自分の言いたいことのみ言って終わらせてくる。ある意味最強の話術かもしれないな。
ふぅ～、ここまで両親も愛し子にぞっこんだったとは。こりゃ門の前で本当の決戦だ！　なんて言ってたのが恥ずかしくなるな。
既に戦う前から勝敗は決していた。どこの軍師が言った言葉かは忘れたけど、『戦いは始まる前に終わっている』とは至言だな。
あの女に出会ってから不幸の螺旋階段をジャンプしながら落ちている気分だ。
あれから両親に一方的に勘当された俺は『その腐った心を水龍様の美しき水を浴びて浄化してくるがいい！』と言い渡され、水龍を祀り聖なる龍水があるとされるこの国唯一の教会で己の罪を償えというらしい。
そのままあれよあれよという間に馬車に乗せられて教会まで護送されているのだ。
「ったく、何故この私がこんな穢れた存在と一緒にいなければいけないのだ!?」
そして今一番の不幸はこのヒステリックに叫びブ男が一緒の馬車の中にいることだ。
どうやらコイツは熱心な水龍信者で、その威光をもってそれなりの地位にいるようだ。
これでも公爵令嬢――まあこれももう元がついてしまうがな。一体俺は1日に何回元をつけるのだ。――だからな。形だけでもそれなりの対応が求められるというわけで、このブ男に白羽の矢が立ったわけだ。
馬車に乗る前は『私がこの背信者に愛し子様の素晴らしさを説いてみせます』みたいなことを言っていたが、最初は確かに愛し子に対しての俺の態度の事を責めていたが、それを遠回しに許可してきた貴族の名や貴族のルールに反したメアリーの行動を挙げてゆくうちに最終的にヒステリックに叫ぶこと以外しなくなっていた。
そもそも、俺のしたことは貴族社会の暗黙のルールや基本的な人付き合いの範疇に収まらないメアリーの言動に少々大袈裟な注意をし

ただけのこと。事実、メアリーが愛し子だと発覚するまでは俺に誰も何も言わなかった。
それが貴族にとって正しいことだと皆が理解しているからだ。
それを目の前の男も分かっているからこそ、こうやって叫びながらネチネチとした嫌味しか言わないのだろう。
俺としては、もう少し粘っては欲しかったのだがな。久方ぶりに相手を論破出来て楽しかった。
最近は感情論による一方的な子供が多かったからな。大人であるはずの両親もあそこまで感情のみで話にならなかったのが痛かったしな。
とはいえ、そろそろ鬱陶しいな。聞く価値もない猿の戯言ほど頭痛の原因になるものはない。
このまま順調に行けば1時間くらいで教会に辿り着くだろうが、それまでに俺の堪忍袋の緒が切れないだろうか？
それからも目の前に座る男はグチグチとかろうじて聞き取れる音量の声で文句を垂れ流している。
（もうそろそろ殺ってしまうか？）
そう思っていると、不意に馬車が大きく揺れた。
「な、なんだ!?　っち、今日はなんて日だ!!!」
まさかこの異世界であの○峠さんの名言を聞けるとは!?　少し感動したが、まずは外を取り囲んでいる１０人組の相手するとしようか。
馬車から出ると矢で射抜かれた従者と、弓や剣で武装した男共が馬車の周りを囲っていた。
どうやら、思っていた通りここらを縄張りにしていた盗賊のようだな。
俺が馬車から出てくるのが見えたからか、囲っていた盗賊共が近づいてきた。
「へっへっへ、こんな治安の悪い道を護衛の騎士も無しに移動するなんて襲ってくれと言ってるようなもんだぜ、貴族様よ！」
「そうだろうな。恐らく襲って欲しかったのだろう。この辺りに盗賊

がいるという情報は知っているからな」（まあ、バッドエンドの中ではありふれた結末だしな……）
「へ～、なるほど。オメェさん厄介者って訳か。どうやら身代金は取れなさそうだが、その着ている服や容姿なら高く買ってくれる客もいるだろうよ」
　なんだ盗賊とはいえ多少は知恵があるのだな。今の会話で俺が厄介者だと分かるとは……。
「お～い、アニキ！　まだ馬車の中に人がいますぜ」
「な、なにをするんだ!?　私は水龍教徒の1人だぞ。こ、こんなことをすれば水龍様の祟りが下されるぞ」
「お～、お～、そいつは怖いな。げっはっはっはっは!!」
「「「ゲラゲラゲラゲラ!!」」」
　あの男の脅しが余程ツボに入ったのか、盗賊共は腹を抱えて笑い転げている。
　……少し羨ましいな。俺があんな風に大笑いできたのはいつが最後だったか。
　この世界に生まれ変わって十数年。全ては未来の為にと努力してきた。その為に笑うことなく、友を作ることもなく、遊ぶことさえ少しだった。
　その結果がこのありさまか……。もう、好きに生きてもいいだろう。
「そういえば、教会に行ってどうするかなんて考えていなかったな……」
「あん。どうした貴族様よ？」
「ふむ、いっそのこと面倒な事は全て暴力で解決出来たら簡単だなと思ってな」
　そう言うと目の前の男はキョトンとした顔になったかと思うと、盛大に笑いだした。
「アッハッハッハ!!!　そうだな、暴力で解決できたら簡単だ。俺らもそうやって生きてきた。けどよ、甘やかされて育てられたお嬢ちゃんに暴力なんて振るえんのか!?」

確かに、ただの令嬢ならばこの場合は泣きながら親の名で威張り散らすことだけだろう。
だが、お前の目の前に立つ令嬢は普通の令嬢じゃないぞ。
「ならお前に見せてやろう……」
「は？　なにぼぉ!!!?」
俺は油断している男の顔をただ力いっぱい殴り飛ばした。
そしたら男の顔に面白いように拳が沈み込み、鼻の骨を折って鼻血を出しながら吹っ飛んだ。
「「「ア、アニキ!!!」」」
「テメェ！　アニキに何しやがるんだ」
俺が男を殴り飛ばすと、残りの盗賊共が剣やナイフを抜いて迫ってきたが……。
ボコバキドカッ!!!
「「「「ずみばぜんでした!!!」」」」
俺に無謀にも挑んできた盗賊共は、顔面タコ殴りにされてボコボコになって全員土下座で俺に許しを乞いている。
「ふん。これで分かったか。水龍様はいつでも我らを見ておるのだ」
「何故貴様が偉そうにしてるんだ？　こいつらを倒したのはお前でも水龍でもないだろう……」
さて、こいつらをどうするか……。
「さて、お前らの今後は衛兵に引き渡されて牢屋行きだ！」
こいつ……。俺がこの盗賊共をどうするか悩んでいたら、勝手に衛兵に引き渡すことを決めてやがる。
「おい、お前何を勝手に決めてやがる」
「グヘェ！」
このブ男の背中を蹴飛ばして地面にキスさせると、俺は無様に倒れたブ男をイス変わりにして目の前の盗賊共に一つの提案を持ち掛ける。
「おいお前ら、このまま衛兵に引き渡されて一生を牢に繋がれた生活なんて嫌だよな」
「へ、へい。そりゃもちろんですが……」

「なら、俺をお前らのアジトまで案内しろ。そうすりゃ許してやる」
「……そりゃ俺らに仲間を売れってことですかい」
ん？　さっきまでヘコヘコと頭を下げて許しを乞いてたのに、いきなり真剣な表情になりやがった。後ろにいる残りの奴らも全員同じ表情だ。
てっきり盗賊だし平気で仲間の元まで案内するかと思ったが、案外コイツら仲間を大切にする系の悪党だったか。
「まあ安心しろ。別にお前らの仲間をひっ捕らえる訳じゃない。ただお前らの頭の立場をよこせと言いに行くだけだ」
「いや、それただ盗賊行為じゃねえっすか!?」
「いや、盗賊のお前らが言う台詞か？」
盗賊のツッコミをツッコミ返すと突然イス変わりに使っていたブ男が俺を押しのけて立ち上がろうとしてくる。
「ぐうっ、この！　どけぇ！」
まあ、鍛えてもいない貧弱なブ男じゃこの俺を押しのけて立ち上がることはできないがな。というかさせない。
「貴様！　愛し子様に危害を加えるどころか、盗賊共の頭になるだと。やはり、王子が懸念していた通り貴様との婚約を破棄して正解だったな。貴様のような奴が国の手綱を操るなど考えられん」
っち、本当にうるさいなこのブ男は。そろそろ自分の立場を教えておくか。
俺は立ち上がりイス変わりになっていたブ男を自由にさせる。
「さっさと立て、もう命乞いや許しを乞うのも許さん。お前は今この俺の逆鱗に触れた。殺しはしないが地獄を見る覚悟はしろよ」
「へっ？　な、何を言っている。貴様は分かっているのか!?　ここで私に危害を加えるということがいかに愚かなことかを!?」
もう面倒だ。我慢の時間はもうとっくに終わった。この男が死なない程度の魔力を拳に纏わせる。
より痛く、より長く、よりエゲツない攻撃を繰り返す。
「グッ、ブベェ、イギャ、ゴハッ!!!」
まずは歯が折れて血が噴出した。次に右腕の骨が折れて関節が２

つに増えた。更に次には顎の骨を砕いてまともに喋ることが出来なくなった。最後に腹を穿つと内蔵のいくつかが逝ったのか、口からかなりの量の血を吐き出した。

もう完全に死に体だったが、まだ辛うじて生きているようでピクピクと虫のように痙攣して動いている。

「ふぅ～、いや～スッキリした。さて、そこのお前らまだ話しの途中で済まなかったな。それじゃあ改めて聞くけどお前らのアジトに案内してくれるか？」

「「「「あっ、はい。案内しますので命だけは勘弁してください」」」」

先程までとは打って変わった態度で大人しく自分たちのアジトに案内してくれる気になってくれた。

まあ、あんな凄惨な拷問レベルの痛めつけを目のあたりにすれば普通の人間なら素直になるよな。

さて、ここからだ。もう俺は我慢はしねぇぞ。俺がやりたいようにやる。

まず目的の一つは俺を捨てた国への報復だ。

絶対に後悔させてやるこの俺を怒らせたことをな！

「クフフフッ、アッハッハッハ!!!!」

後に、悪逆非道の魔王と後世の歴史に残る龍殺しのアリアの伝説はここから始まった。

奪っていいのは奪われる覚悟のある者だけだ

「ここの盗賊共のお頭はとっとと出てきな！今日からお前の座を俺が座ってやるからよ！」

突然アジトに乗り込んできた貴族らしき女が喧嘩を売ってきた。当然、それをまともに受け入れる者はおらず、アジトにいる盗賊は全員が腹を抱えて笑った。

「「「「ギャッハッハッハッハ!!!」」」」

「おい嬢ちゃん。ここはお子様のお遊戯会の場所じゃねぇんだぜ。生意気な口を叩くのは感心しねぇな」

「「「ボ、ボス」」」

奥からボスの風格を漂わせた片目を眼帯で覆ったデカイ男が登場した。俺を案内した盗賊たちもボスと言っていたし、コイツがこの盗賊団の頭で間違いないだろう。

「あんたがここの盗賊団の頭だな。だったら悪いがさっき言ったことは洒落や冗談でも何でもない。正真正銘ここの盗賊団の頭の座を譲ってもらいに来た」

そう先程と同じように宣言する。

「あっ？」

「あんま調子に乗んじゃねぇぞ！」

近くに座っていた下っ端の数人が立ち上がってナイフを片手に近づいてくるが、問題はない。

「「グベェ！」」

瞬き一つするよりも短い時間で近づいてきた下っ端をぶっ倒す。

後ろにいる案内係の男は『あ～やっぱり』と呟く。まあそりゃそうだな。ここにいる連中はボスを除けばどんぐりの背比べ、自分とさほど実力の変わらない相手ではこうなることは目に見えているだろう。

「悪いな。多少は手荒な真似になったが、お前らも盗賊ならこれぐらいの事は承知しているだろう」

「ふん、やられっちまうような弱い奴が悪い。この世界なら当然の常識だ。別に謝る必要はねぇ。だが、分かっているとは思うが、その世

界に足を踏み入れたってことは当然自分もそうなる覚悟があるってことだよな？」
「当然だ。奪っていいのは奪われる覚悟のある奴だけ。どうだ、至言だろ？」
「そうだな、そいつは気にいった！」
　ボスはでかい図体を大きく利用してタックルをかましてくる。悪くない手だが、所詮はその程度しかない。俺は避けることはせず、ただその場を動かずにボ～っと立っている。
　別に相手を舐めているわけでも、油断しているわけでもない。ただその方が手っ取り早かったからそうしただけだ。
「ノロいな…」
　ボスの手が俺を掴むよりも一瞬速く動いて懐に潜り込む。
　そして…
「吹き飛べ、エアロバースト」
「……ッ!?」
　両の掌からボスのガラ空きとなっている腹に風の魔法を叩き込む。カウンターの要領でぶち込まれたボスは声を上げる事なく、反対側の壁にメリ込むほど吹き飛んだ。
「「「「……」」」」
　一瞬のこと過ぎたのか、アジトにいた男たちは全員理解することができない様子でポカンとしていた。
「おい、これで俺がこの盗賊団の頭（かしら）になったってことで構わないよな」
　そこでようやっとハッと正気に戻った盗賊共はそれぞれ腰に備え付けていたナイフを片手に立ち上がる。
「テメェ！よくもボスを!?」
「誰が女の下で働くかボケ！」
「俺らが誰の元に着くかは俺らが決めるんだよ！」
「そうだそうだ！」
　どうやら誰も俺が頭になることを認めないようだ。
「っち、まあいい。誰に逆らおうとしているのか骨の髄まで教え込んでやる」

ポキポキと拳を鳴らして威嚇すると、先ほど吹っ飛んだボスの姿を思い出して警戒したのか、後ずさりする盗賊たち。
まあ、別に警戒しようとしなかろうと結果は同じだ。チワワがライオンに敵う道理はないように、俺とコイツらの戦力の差はそれほど離れている。
そこからは速攻だった。手始めに近くに立っていた男に柔道による投げ技で投げ飛ばし、そこから順に蹴りとパンチによる一撃を喰らわしてダウンをとっていく。
これでも幼い頃から鍛え上げているし、両手足に魔力を纏わすことにより単純な攻撃力を上げることもできる。
今の俺の実力は魔法を組して王国でもトップレベルの実力だ。もちろん、才能があったのだろう。言われたことはすぐにマスターできたし、魔法だって前世の知識を参考にしてより高度で実戦的なものを作り出すことが出来た。
今の俺に敵わないものがいるとすれば、それは伝説に語られる龍くらいなものだろう。
だから当然こんな盗賊共に負ける筈がなく、アジトに突入してものの数分で制圧は完了した。
目の前には正座で判決を下されるのを待つ盗賊たち。そのありさまは酷いもので、タンコブに鼻血とおよそ漫画でボコられたザコの姿であった。
「さて、これで俺がここの盗賊団の頭(かしら)になることに反対の奴はいねぇよな？」
「「「「はい。貴方こそが俺たちのお頭(かしら)です」」」」
先程まで歯向かってした姿勢はどこへ行ったのか、皆が口をそろえてアリアを頭だと認めていた。
「それで、ここの盗賊団の名前って何かあんの？」
「えっと、どんな相手もぶっ飛ばすていう意味を込めてオックスホーンって名前でやってます…」
「そう。なら今日からその名前は改名な」
「えええ！そんな、この盗賊団結束当時からずっとこの名前でやっ

て来たんですぜ。最近じゃこの名前を出せばビビる奴らも現れたぐらいなのに…」
「いや、関係ないから。俺が改名って言ったら改名なんだよ。もしかして、文句ある感じ？」
「いえ滅相もありません。お頭が改名って言ったら改名ですね。そうだろお前ら！」
Ｙｅｓ　Ｍａ，ａｍ
どうやら誰も文句はなさそうだな。まあ、脅して言うことを聞かせたんだけどな。
「んじゃ今日からこの盗賊団の名前は国の守護龍を殺すって意味で『ドラゴンスレイヤーズ』に決定な」
「あの～お頭、それってもしかして国を襲うって意味に聞こえるんですが…」
「え？そうだけど。何か問題あるか？」
「「「「いや、問題しかありませんお頭!!!?」」」」
まあ、そうだろうな。現状じゃ龍どころか国を相手にしても勝てるかどうかだ。かろうじて勝てたとしても、生き残るのは俺１人のみだろうしな。
「まあ、安心しろ。今すぐ国を相手にするって訳じゃない。ひとまずこの程度の人数で敵うと思うほど俺も楽観的な訳じゃない。ひとまずは、ここらの盗賊団をいくつか仲間に引き入れる」
そう言うと手下共はホッと安堵の息を吐く。どんだけ俺が考えなしの人間だと思ってんだコイツら。
「んで、ここいらで使えそうな盗賊団っていそうか？」
「へい、ここいらでいうと俺らのような規模の盗賊団は４つ。俺ら以上の規模の盗賊団は１つしかありません」
「ならまずその４つの盗賊団から仲間にしていって、最後にそのデカイ盗賊団を仲間にするか」
「そうですね。お頭の実力なら最初に挙げた４つの盗賊団なら問題なく仲間にできるでしょうが、最後の盗賊団だけは別問題です。あそこのボスだけは次元が違う…」

元ボスの顔が沈み込む。そんなにヤバい奴がボスなのか？しかし、今までそんな危険な奴の名前を聞いた覚えがないな。まあ、ただの貴族令嬢が盗賊のボスの話を聞くことはないんだろうがな。

一応俺の実力を知ってる元ボスが警告してくれレベルだ。警戒だけはしておくに越したことはないだろう。

「あ！そういえば、お前の名前ってなんだっけ？ずっと元ボスで認識してたわ」

「俺の名前はボルゴって言います。以後お見知りおきをお願い致します」

なんかどこぞの『俺の後ろに立つな』の人にそっくりな名前だな。けど覚えやすいし気にすることでもないか。

「よし、そんじゃ明日からその盗賊団の勧誘な。とりあえず今日は俺が頭になった記念で宴をするぞ！」

「了解しました。おいお前ら俺たちの新たな頭の最初の命令は宴だそうだ！準備しろ!!!」

「「「「ウェ～イ!!!!!!!!」

こいつらノリがいいな。ついさっき殴りこみで頭になった奴を祝う宴だっていうのに。いや、それはこのボルゴが負けを認めているからか。そういや、最初に会った盗賊たちも仲間の情報を売ることに抵抗していたもんな。

これが人徳ってやつか。俺には一切無いやつだな。

「あっ、そうだ。お～い！ボルゴ。もし宴するのに金が足りなかったらいいモンがあるんだけど？」

「いいモンですかい？一応は宴するぐらいの備蓄はありますが、そのいいモンってのは一体？」

俺はここまで案内させた盗賊たちに命令してそのいいモンをここに持ってこさせる。

「うへぇ」

「マジかよ…」

「あれ生きてんのか？」

そのいいモンを持ってくると下っ端盗賊たちが顔を青ざめて口々

に悲鳴じみた声を漏らす。
「頭(かしら)これがそのいいモンですかい？俺には半死半生の死体にしか見えませんが？」
俺が持ってこさせたのはさっき半殺しにした鬱陶しいブ男だった。
こいつは前に説明した通りそれなりの高い地位に立つ人間だ。その着ている服を売れば一般家庭の半月くらいの生活費が手に入るだろうし、身代金を要求すればかなりの額の金を手に入れることも可能だろう。
「ほ～、そいつはいいことを聞きやしたぜ。おい、聞いたかお前ら！いつまでもブルってやがる。さっさと動きやがれ！」
「「「へい、了解しました！」」」
ボルゴに叱咤されて先程まで青ざめていた盗賊たちは一斉に動き出した。ブ男の着ていた服を脱がし、粗末な布の服に着替えさせ手足を縄で縛っていく。
その手際は流石盗賊と褒めるレベルで、宴の準備をする者と身代金を要求する者に分かれて行われる。
３０分もする頃にはそこそこ豪勢な料理がテーブルに並べられた。俺の手には酒の入ったジョッキがは握られており、皆が俺の乾杯の音頭を待っている。
「よし、お前ら皆ジョッキは持ったな。長ったらしいことも面倒なことも言わない。全員俺を信じてついてこい。ただそれだけだ。そんじゃカンパ～イ！」
「「「「カンパ～イ!!!!」」」」
これが災厄の龍殺しの異名を語る盗賊団ドラゴンスレイヤーの結束の日であった。

スカウトしたいならば、まずは全力で叩きのめせ!!!

ふもとの村では、見れば逃げろ！　会えば身ぐるみを捨てて命乞いをしろ！　とまで噂される死の魔剣団と呼ばれる盗賊団のアジトから怒号と剣のぶつかり合う音が響いてくる。

「敵襲だ！　オックスホーンの奴らが攻めてきやがったぞぉ!!!!」

その声を合図に、死の魔剣団のアジト目掛けて剣を持った男共が攻めこんできた。同業ゆえに攻め込んできたのが隣の領地を縄張りにしていたオックスホーンの盗賊団だということがすぐ理解できた。

「うおおぉぉぉ!!!」

「大人しくしやがれ！」

「返り討ちにしてやらぁ！」

罵倒が飛び交う混戦入り混じる戦場の最中で、誰もが避けて通る場所が1つだけあった。

そこに並び立つのは互いの盗賊団のボスである、人よりも頭一つ飛び抜けてデカイ筋肉のボルゴと、極東の衣装を着て腰に刀を携える長髪のイケメンよりのガルゴの2人であった。

「よお、久しいなガルゴ！」

「お前の方こそ、わざわざ俺に殺されるためにここまで来たのかボルゴ!?」

片方は気楽に旧友に挨拶を交わすような雰囲気だが、もう片方は血管が浮き出るほどの形相で腰に携えた刀に指をかけている。

いきなり問答無用でアジトまで襲い掛かってくればキレないほうが無理があるだろう。

「まあそう言うなよ。実はテメェに一つの提案があってここに来たんだ」

「提案だと?　ここまでのことをしておいてロクなことじゃねぇのは分かっているぞ！」

「クックックック、まあそうだな。俺も同じ立場ならそう言うぜ。だがな、これは俺とお前らの今後の未来の為の話しだ。少しくらいは耳を傾けな」

そこまで言うと、死の魔剣団のボスであるガルゴがほんの少しだけ刀にかけていた指を離した。
未だに顔は怒りの形相のままであるが、ひとまずは会話をする気になったのだろう。
「へへ、別に難しい話をしに来たんじゃねぇ。簡単なことさ、ここにいる奴ら全員をスカウトしに来たって訳だ」
「ほう、スカウトねぇ～。このありさまを見て素直に信じられはしねぇが、そこは盗賊だからってことで流してやる。だが、俺は俺が認めた奴以外の命令は聞かねぇ主義だ。文句があるならこいつでケリをつけようぜ！」
そうして刀を鞘から抜くと、その剣先をボルゴに突きつける。すでに臨戦態勢に入るガルゴ。
そして、そのガルゴの肩を後ろから叩く者がいる。
トントン
「なんだ？　悪いが後にしろ！」
トントン
「いい加減にしろ！　目の前に立つ男の危険性が分かんねぇのか!?」
トントン
「ああもう！　何だってんだ!!!」
ついに我慢できずにボルゴから目を離して後ろを振り返ると、そこには戦場には似つかわしくない少女がニコニコと笑いながら拳を構えて待ち構えていた。
「え～い！」
「ごはっ!?」
可愛らしい声とは裏腹に、大の男を吹き飛ばすような強烈な一撃がガルゴの頬を捉える。
それを見ていたボルゴは呆れたような目でこちらを見ている。
「うへ～、相変わらず容赦ないですね。あれって生きてますか？」
「うるさい。お前はさっさと周りのザコ共を処理してこい。俺はこの男を相手にしといてやるからよ！」
「あいよ！　ならこの場は任せますが、くれぐれもやり過ぎっちまわ

ないように頼みますよ」
　ヘイヘイっとボルゴのお小言を軽く聞き流すと、ようやくガルゴが殴られた衝撃から立ち直り、ふらつく足取りの中で刀を手に近づいてくる。
「これはやられたな。まさかこんな伏兵が潜んでいたとはな。あのボルゴがこんな手を使うとは……。いや、先程の話しぶりだとお前の方が立場が上のように聞こえた。この急な襲撃の原因もお前か!?」
「ご明察！　流石は部下を纏める立場の人間は理解が早いな。うちの国のバカ貴族共と交換しても案外上手くできるんじゃないか？」
　ヘラヘラと笑うアリアを見てガルゴの刀を握る力が強くなる。
　この女は何者だ？　先程の不意打ちは確かに効いた。いつも荒くれ者の盗賊たちを力で従わせているこの俺が何の反応もできずに殴られるなど……。
　それにあの威力はあんな華奢な女が出していいレベルではない。理解不能なことが多すぎてまいってしまう。
　だが、確実に分かることが一つだけある。それは、この女が俺よりも強いということだ。
　俺はこの歳になるまでずっと戦場でこの刀を振り回していた。戦場には弱い奴もいれば強い奴もいる。いくつもの修羅場をくぐり抜けた結果、俺が一番に身につけたのは敵の強さを見抜く目だ。
　その目で見たこの女の強さは今まで出会ってきたどんな敵よりも歪で凶悪だ。構えは素人そのもののクセに、その奥にある強さは歴戦の戦士を軽く超えている。
　ふふっ、初めてだよ、俺がこの目で見た敵の強さを疑うのはな。
「どうした来ないのか？　……ああっ！　さっきの不意打ちが効いているのか。ならハンデをつけてやる。俺はこの指一本で相手してやる。どうだ、これならいい勝負ができそうだろ？」
「なっ、バカにしているのか!?」
　確かに実力差はケタ外れに離れているのは理解している。だが、指一本で俺の刀を相手に戦うだと……。これでも武人の端くれ、その言葉を後悔させてやるという思いで刀を振るった。

「てりゃ！」
「よっ」
「なっ!!?」
だが、女は余裕そうに刀を宣言通りに指一本で止めて見せた。しかも、爪ではなく腹でこの鋭い刀を止めて見せたのだ。
普通なら振るうどころか当てた状態で少しでも動かしただけで人の肌など斬り裂くこの刀が、何の防具も装備していないただの指に止められたのだ。
これで驚愕しない者などいはしないだろう。
俺が驚いて声を上げると、次の瞬間には俺の刀を受け止めた指が目の前に現れる。
「うりゃ！」
「うぐっ!?」
鋭い痛みが額に走った。恐らくデコピンされたのだろう。あの女の指を斬り落とそうとした代償がデコピンとは……。つくづくバカにされていると感じる。
だが、いいだろう。もう指一本だと油断も怒りもしない。今の俺にとってこの女の指一本が強敵だ。その強敵を斬り飛ばすために全力でこの刃を振るってみせる。
「ふぅ～、居合抜刀術」
刀を鞘に収めて息を吐きだすと同時に全身を脱力させる。
そして、完全に脱力しきった体から一気に力を込めて刀を抜き放つ。
『朧連撃１８連』
１８の居合による斬撃は一直線ではなく曲がりくねった蛇のようなもので、上下左右から襲い掛かるこの連撃を受けて生きていた者はいなかった。
「だったんだけどな……」
「ふっふふ～ん！」
目の前の女は鼻歌まじりに指だけで全て弾き返していきやがる。マジもんの化け物だ。

「おいどうしたもうお終いか？　剣の筋は中々良かったが、それだけじゃ俺に傷１つ付けることも不可能だぜ！」
　カッカッカ！　と笑う女の顔を見て絶望する。一体俺は何の為に剣を振るってきたのか。ここまで俺がしてきたことは全部無駄だったてことなのかと思ってしまう。
　もうこの手に握った刀を手放して楽になろうか？　そう考えると

「なんだその顔は！　ここからが楽しいところだろうが、まだ俺は本気の２割も出せていないぞ！　やるんならもっと全力を出してかかってこい！　お前もまだ出していない本気の１００％の全力を出してな!!」
　なんだそれは……。あの朧連撃１８連は俺の全力だった。それを使ってかすり傷１つ付けれねぇのに、その上更に全力を出せってか。
　絶望して緩みかけてた刀を持つ手に力が入る。
「上等だ！　やってやるよ！　こうなったら死なばもろともだ!!」
　スピードが駄目なら力で斬り裂くまでだ。
「ハアアアアアア!!!」
「う～ん。居合が駄目なら力でっていう柔軟な対応にはマルをやってもいいが、居合の使い手が力勝負はナンセンスだろ？」
　あっさりと指で受け止めて返される。クソこれも駄目か!?　力でならいけるって考えは甘すぎたか。
　なら他にどうする？　テクニックで翻弄して斬るか？　いや駄目だ。あの朧連撃１８連はスピードとテクニックの２つを極限にまで研ぎ澄ませた必殺技だ。それを鼻歌まじりで受け止められたのだ。今更テクニックが通用する相手とは思えない。
「どうすればいい？　どうすれば一矢報いられる？」
　歩いて近づいてくる女に逃げながら効かないと分かっているも刀を振るい続ける。けれどあの女は欠伸まじりに防いでいく。
「どうした？　本当にもう全力は出し尽くしたのか？」
「クソォ！　ああそうだよ。あの技が俺の本気だった。あれを受けて生きていた奴なんていなかった。だから、この後のことなんて知らね

え！　あれを受けて無傷だった奴にどう立ち向かうかなんて知らねぇんだよ!!!」
　もうどうしようもない思いを口に出す。流したくもない苦渋の涙が溢れ出る。ずっと強者だと信じていた。刀さえあれば自分は負けることはないなんていう根拠のない自信があった。
　それがこの1分にも満たない短時間で打ち壊されそうになっている。
「う～ん。どうもお前は考えすぎてドツボにはまっている節がある。さっき言ってた朧連撃とやらの必殺技も、中々面白い技だったが、2つのこと同時にしようとして逆に足を引っ張っている気がするぞ」
「2つのことを同時に……だと？」
「ああ、居合ゆえにスピードを求め、敵に躱されたり受け止められないようにとテクニックを欲する。そういう思いが見えた。別に悪いとは思わないし、技自体の完成度は非常に高かった。だが、必殺とつけるには大げさすぎる。精々が牽制か次の技までの繋ぎといったところだな」
　本当に何なんだコイツは？　俺の必殺の技が牽制とか繋ぎだとか……。まるで次元の違う相手からの言葉に困惑するばかりだ。
　だが、それでも今コイツの口から俺の技の完成度が高いと褒めてもらった。そんなこと部下共から飽きるほど聞いた筈なのに、こんなスゲェ奴から褒められる。それだけで胸が高鳴るぐらいに嬉しく感じてしまう。
「そうかよ。ならもう深くは考えない。俺はただ自分の腕を信じ抜くことに決めたぜ！」
　再び刀を鞘に戻し、今度は最もやりやすいと思った姿勢になるように腰を深く落として呼吸する。どこからどう見てみても隙だらけの無防備な格好だ。
　今の俺なら剣を初めて持った野郎にでもあっけなく倒されっちまうだろう。
　だが、あいつは絶対に手を出してこない。そういった確信がある。
　だからこそ、例え無防備になろうとも次の一瞬に今まで出したこと

もない全力を出して答える。
それが今の弱い俺があいつに出来る唯一のことなのだから。
「必ず殺せる技を魅せてやる。即興ゆえに名はまだないがそれは勘弁してもらおう！」
「――いいぜ！　テメェの全力の全力で出す技を魅せてみろよ！」
もうアリアの顔に貴族令嬢らしいおしとやかな笑みは浮かんでいなかった。それは獲物を喰らう悪魔のような笑みで、見れば心の弱い人間ならば泣いてしまいそうな迫力であった。
だが、それを真正面から見ているガルゴの顔は同じような笑みを浮かべていた。
ここは敵味方入り混じった戦場だというのに、この2人の目には互いの姿しか映ってはいない。それほどまでに集中しているのだ。
2人の間の空気が痛いほどに張り詰められている。
ガルゴの親指が刀を僅かに抜く、それに合わせてアリアの指にも力がはいる。
「しっ!!!」
「――っっ!!!」
ガルゴが放った一撃はただただ速かった。アリアが動きをみせるよりも早く。今まで生きてきたなかでの最速の動きだった。
恐らくこの世界で今のガルゴの動きを見切れる者など数えるくらいしか存在しないだろう。まあ、その数えるくらいのなかに入っているのが、ガルゴの目の前に立つアリアなのだが。
すれ違いざまにガルゴが放った一閃は容易くアリアの指が受け止めた。
これで先ほど言っていた必殺の技を魅せるという言葉は？になった。だがしかし、変化は2つあった。
1つはガルゴが全力の全力を出したということ。体は酸素を求めて荒い呼吸を繰り返し、刀を持つ手に意識を向けていなければ落としてしまいそうになるほどに疲れ切っており、足はもうガクガクと笑い過ぎて今にも崩れ落ちそうだ。
そしてもう一つの変化は――

「ほう、油断はしていた認めよう。慢心もしていた認めよう。だが、力を抜いていたなんて間抜けは晒してはいなかった。称えよう、お前はまごうことなき強者だよ」
　アリアの刀を受け止めた指から一筋の赤い血が流れていた。あのどうあがいても超えられない壁と認識していたアリアの指から血を流させたのだ。
　これを知らない人間が見ればたかだか小娘相手に刀を使っても皮膚を斬り裂くことしかできないのかと侮られるだろうが、今の貴族を辞めて闘いに身を浸す盗賊のアリアに血を流させたと知る者が知れば凄まじい偉業だと褒め称えるだろう。
「ふふ、よく頑張ったと褒めておこうか？　とはいえ、俺も人間でな？　当然のこと血が出れば痛いんだよ」
　もし今ここにボルゴが立って聞いていれば「人間……？」と疑問の声を呟いていただろう。ちなみに、その後アリアにぶっ飛ばされるまでがお約束だ。
　とまあ、そんなことはおいといて。今ここに立っているのはボルゴではなくガルゴであって。アリアに傷を負わせたのもガルゴだ。
　そうなるとどうなるか？　想像することは簡単だ。例えば小学生の力の強いガキ大将（ジャイアン）に身の程知らずのいじめられっ子（のび太君）が噛みついたらどうなるか。
　結果は決まっている。それはもう見るに絶えないボコボコにされるのだ。
「痛いじゃすまないから覚悟しろよ！」
「ぶっ！　べっ！　ぼごぉ!?」
　デコピン（岩が砕ける威力）シッペ（骨にヒビがはいる威力）チョップ（二度と逆らう気力が湧かないレベル）の3連撃がガルゴを襲った。
　ただの罰ゲームクラスの攻撃でも、アリアが殺（や）れば必殺ともいえる威力になるのだ。（ガルゴよ、哀れな……）
　地に打ちのめされたガルゴが転がるなか、雑魚の対処を任せていたボルゴがようやく戦い（調教）が終わったとみるや近づいてきた。
「頭！　やり過ぎないようにって言ったじゃないっすか。どう見ても

これ瀕死ですよ。本当に仲間になるか心配なんっすけど？」
「ふん、心配すんな。回復魔法を攻撃と同時にかけていたから見た目よりも問題はない。それにこんだけ力の差を見せつけておけば従順になるだろう！」
「従順どころかトラウマになってそうなんですけど？」
未だピクピクと痙攣して辛うじて生きていることが分かるガルゴを見て心配するボルゴと違って、アリアはこの程度では心配はしない。
「まあ大丈夫だろ。ところでそっちの方はどうなったんだ？」
「こっちは頭以上に問題なく終わりましたよ。ウチの奴らはほとんど無傷で、相手も軽症程度に抑えましたんで」
「当たり前だな。そうでなければお前らは帰ってから地獄を見ていたぞ」
「いっ、嫌ですぜ！　もうあんな地獄すら生ぬるい修業は勘弁すよ！
まあ、成果はちゃんと出てますが……」
青ざめた顔でイヤイヤと両手を前に出して拒否のポーズを取るボルゴは、一度アリアから最低限の強さになるまで叩き上げてやると言われてやらされた修業内容を思い出す。
それは四六時中アリアとボルゴ＆部下たちの命を賭けた組み手（命の危険はボルゴ＆部下たちのみ）をすることだった。
その際に課せられたことが１つあった。それはアリアが前世の知識（漫画）を用いて開発した様々な技の１つである《魔闘練武術》を身につけることであった。
《魔闘練武術》とは、簡単に言ってしまえばドラゴンボールの界王拳だ。自身に流れる魔力を魔法陣を介さずに肉体に作用させる効力を持つ技であり、使用すれば自身の身体能力を何倍にも高めることができる。
とはいえ、そんな効果の高いものがそう簡単に使える筈はない。この技は相当の魔力が無ければあまり身体能力の変化は見られず、制御を誤れば筋肉や血の流れを異常に高め過ぎてボン！　と爆発なんて危険なことになってしまう場合もある。

まあ、体が誤って爆発するほどの高い魔力をボルゴたちは持っていないため起こりはしなかったが。
それに、この技は制御の難しさも問題だが、それ以上に問題なのは会得の方だ。単純に魔力で強化といっても簡単なことではない。細胞の一つ一つに魔力を付与する精密さと、それを可能にする魔力コントロールが必要とする。
それは一流もしくは二流の魔術師が出来る芸当だ。当然のこと魔術師でもない勉学もロクにしていないただの三流以下の盗賊が出来る芸当ではない。ではどうやって覚えたのか？
答えは１つだけ。いつの世も、どこの世界にいっても変わらない。当たり前のこと努力だ。
文字通り命を賭けた組み手が彼らの生存本能を揺さぶらせ、心身魔力共に成長――否、飛躍させたのだ。
未だ二流の域に片足を踏み入れた程度だが、それでも僅か数日でこの成果は驚きを通り越して奇跡とすらいえる。だがまあ、それにふさわしい地獄をもう一度経験したいとは誰一人思わないだろうが……。
とまあ、《魔闘練武術》を修得したボルゴは３倍の部下達は辛うじて２倍のパワーアップに成功している。当然だが、開発者のアリアは１００倍以上のパワーアップが可能である。
ちなみに、アリアは常日頃から《魔闘練武術》を発動させ続けており、言うなればセル編のスーパーサイヤ人の常時維持をし続けている。
そんなわけで、アリアが育てた盗賊たちがこの程度の奴らに負けるどころか、軽症で捕らえることも余裕である。今は縄で縛り付けて動けなくしているが、仮に動けたとしても反抗する勇気も力もないだろう。
「ぐぐぐぅ……。俺たちはどうなる？」
回復魔法が効いてきたのか、ふらつきながら立ち上がったガルゴは今後の自分たちの扱いをどうするのか聞いてきた。
「安心しろ。別に奴隷のような待遇にはせん。お前らには俺の野望を手伝ってもらう」

「野望……？」
「クックック、聞いたら驚くぞお頭の野望はよぉ！」
「まあそうだろうな。自分でも俺以外の人間が言ったら腹を抱えて笑っていたさ！」
　1人ついていけずに呆然とするガルゴをよそにアリアとボルゴの2人は盛り上がる。
「なら話そう俺の野望を！　俺はこの国を相手に喧嘩を売る。その際に守護龍も殺す。それが俺が掲げる野望だ！」
「はっ？」
「だっはっは、そりゃそうなるわな！　俺も最初はそういう顔になったぜ！」
　あまりにスケールの違う話しに呆然とするガルゴの肩をボルゴはバシバシと笑いながら叩く。
　それでようやく我に返ったガルゴはその野望を否定する。
「バカな!?　できる筈がねぇ！　国を相手にすることが無茶だってのに、そのうえ龍を殺すだと！　バカも休み休み言え。そんなことができるわけがねぇんだ」
　吐き出すような思いを口に出すと、そのままドカリと地面に座り込みアリアの野望を夢物語だと切り捨てた。
　それに対するアリアの答えは単純なものだった。
「なら俺と一緒についてこい！　夢だろうが理想だろうが、お前の見たこともない光景を見せてやる。だからこの手を握れ！」
　アリアから差し出された手に戸惑いを覚えるが、先ほど己の刀をこの手の指で止められた事実を思い出し、もしかしたら、こいつなら本当にその野望を叶えてしまうのではないか？　そう考えてしまう。
　だからガルゴはその手を――――
「分かった。あんたがどこまでいけるのか、俺とこの刀で見届けよう。だから、あんたの仲間に入れてくれ」
　掴み立ち上がった。その強さと信念がどこまで通じるのかを見るために、あるいは突き通すことを信じてしまった為にか。
「ＯＫ！　これでお前たちも今日から俺の仲間だ。さあ野郎共！　歓

迎の宴を開くぞ。準備しろ!!!」
「「「「うおおおおぉぉぉぉぉぉ!!!」」」」
すぐさま死の魔剣団たちを拘束していた縄を切って解放すると、早速宴の準備に取り掛かった。困惑する死の魔剣団の盗賊たちも、ボスであるガルゴから、これからアリアの傘下に入ることを宣言されると、戸惑いつつも納得し、攻めてきたはずのドラゴンスレイヤーズの盗賊たちと一緒に宴の準備にはいっていった。
「これで、残る盗賊団はあと3つと1つですね」
「ん？　あと3つと1つってまさか!?　お前らあそこも仲間に引き入れるつもりか!!?」
「お！　今ので分かるんだ。そうだぜ！　俺の野望の為にここいら全ての盗賊団を仲間に引き入れるつもりだ。そこに例外はねぇ！」
自信満々に答えるアリアを見て、こいつを相手に警告をすんのもバカらしいと考えたのか、肩の力を落として刀を手に取る。
「そんな……。いや、国と龍を相手取るつもりのあんたに警告すんのも野暮ってもんか。いいぜ！　とことんあんたについていく。よろしくな！」
「ああ、よろしく頼むぜガルゴ！」
互いに認め合ったことを証明する握手を交わし、夜が明けるまで新たな仲間の参入を祝った宴を楽しんだ。